発掘現場から③

～門前鎮守山城跡の調査について～

先月号で紹介しました門前上屋敷遺跡のすぐ西側に、鎮守山という字名がついた、うっそうとした竹林に覆われた小高い山があります。頂上に義方神社があり、ふもとには災厄除けのサイノカミと馬頭観音菩薩の石仏がまつられています。また山の斜面では近年まで墓地が営まれ、付近には航海の安全と豊漁を願う金毘羅信仰に関連する常夜灯が立てられています。鎮守山はその昔から現代にいたるまで、人々のさまざまな信仰をあつめてきた場所といえます。

調査を行っているのは鎮守山の北の端です。ふもとからの高さは約15mに過ぎませんが、斜面が急なので登るも下るも一苦労です。南側の神社の境内と調査区域の境目は、幅6m、深さ2m、長さ50mにわたる堀で区切られていて、堀の北側には幅10m、高さ1.5mの土塁（土を盛り上げてつくる壁）が築かれています。また斜面の中腹には段段畑のような平地がつくられています。これらの特徴から戦国時代の山城跡ではないかと推測しています。建物のあとは今のところ見つかっていませんが、こぶし大の石をたくさん集めたあとや、炭を作ったあとが見つかっています。量は多くないですが、縄文土器、弥生土器、須恵器（古墳時代から中世にかけて作られた焼き物）、黒曜石製の石器も出土しています。現在、土塁の上には火防の神様である秋葉三尺坊大権現をまつる祠が建てられています。そばに置かれた手水鉢は中世に供養塔として使われていた五輪塔を転用したもので、大きくどっしりとした形から鎌倉時代ごろのものと考えられます。

東側斜面の中腹から門前上屋敷遺跡側にかけては、中世以降に大規模な工事をして丘や平地を造り出していることがわかりました。深いところでは2m近くも盛り土をして埋め立てています。この盛り土の下には人工の石組みが埋まっていることがわかっています。付近は今でも寺屋敷という通り名で呼ばれているそうですから、今後の調査で地名の由来となる遺構や遺物がみつかるかもしれません。

堀（中央）と土塁（右）

中世の土器

門前鎮守山城跡

鳥取県埋蔵文化財センター
名和調査事務所
〒689-3205
西伯郡大山町西坪字中松堀179-5
電話　0859-54-2671
担当者　牧本哲雄

人権のつぼ③

大山町人権交流センター　TEL 0859－54－2286
大山町茶畑1077－3　FAX 0859－54－2413

「鋭きも鈍きも　ともに捨てがたし　錐と鎚とに使い分けなば」に学ぶ

「鋭きも鈍きも　ともに捨てがたし
錐と鎚とに使い分けなば」

この「いろは歌」を7月21日・22日に大分県日田市で開かれた第30回部落解放・人権西日本夏期講座で、部落解放同盟中央執行委員長の組坂繁之さんが講演の中で紹介されました。

これは天領日田が生んだ漢学者・広瀬淡窓の漢詩（咸宜園いろは歌）の最後、「す」の項に書かれている言葉で、咸宜園の教育の特徴を表す有名な一句です。

錐のような鋭い道具と鎚のような鈍器があるように人の個性は様々で、一人一人大切に育てなければならないという淡窓の教育観に基づいたものを表しています。

私たちが人権・同和教育を考える時のヒントを得るものになるのではないでしょうか。

日田は全国的にそう知られた町ではありませんが、住民の最大の誇りは、幕末に作られたユニークな高等教育機関としての私塾「咸宜園」です。

「咸宜」とは「みなよろし」という意味で、広瀬淡窓が開いた全寮制の塾でした。当時、各藩が持っていた藩校が、藩内の上級武士を主に入学させていたのと違い、「天領」の利点を活かして門戸を広く開いていました。全国からの入門者が明治30年までの約80年間に、約４８００人。全国68か国のうち、66か国から入門者がありました。因幡・伯耆からも、後に琉球（沖縄）帰属問題の処理にあたったり、東京府知事になった松田道之などが入門しました。

咸宜園では、身分制度の厳しい当時としては、画期的な入門資格「三奪法」を採用しました。身分、年齢、学歴の３つを「奪う」、つまり問わず、人間みな平等からの出発との考え方でした。

今年の西日本夏期講座が、このような気風・風土をもった、日田市で開かれたことは意義あることと思いました。

▲熱気あふれた講演などが続きました。
（２００５年7月２１日・２２日　大分県日田市）